
GiMMicKパーツ ~夜に咲く~

紫珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G i M M i c k パーツ ～夜に咲く～

【Nコード】

N 4 2 1 8 B

【作者名】

紫珀

【あらすじ】

一般には知られていないが、裏の人間なら一度は必ず耳にする。「機関名：ギミックフェイク」ここに所属する人間は依頼を受ければ何でもやる。今回の依頼は、とある企業の令嬢を暗殺者から保護すること。今、最高の闇機関が動き出す…

エビローグ（前書き）

学生なので投稿する間隔が長くなる可能性がありますので御了承ください。ご指導やご指摘をお待ちしています。感想を頂けたらうれしいです。

エピソード

エピソード

ザンッ！

勢いよく舞う。さっきまで体にくっついていた一部が宙に飛ばされた。少女をボーツと眺めながら。

「…終わり」

一言呟いて、踵を翻して去っていく。

大の男が何重にも重なっている路地を、少女は顔色を変えることなく歩いていく。足元の屍を踏み付けながら…

エピソード（後書き）

続きを執筆中です。

第一話「夜道」(前書き)

テストが近いので頑張って投稿します。

第一話「夜道」

汚れのない真っ白な雪の降る夜。空には満月だけが輝いている。

そんな、静かな夜道を二人分の足跡が通る。

「この季節は寒いね。」

一人の少年は言う。

身長約150センチの幼さの残る童顔の少年は雪のようだった。上は長めのコート。下は細めのズボン。コートの中にはワイシャツとカーディガン。(ブレザーというものだろう)。頭にはニット帽をかぶり、ニット帽からは少し長めのさらさらした髪が見える。いずれも“真っ白な”という形容詞が似合うものだった。唯一、髪の毛だけは白ではなかったが、むしろその色こそが雪のような白銀で、月明かりに輝いていた。

気温はマイナス1度。少年は、あまりの寒さに言わなくてはやっていけない気がしたのだろう。

隣で歩く白く透き通った顔の少女は答える。

「……」

無言の返答。つまりそのぐらい寒いのだろう。彼女の元々の性格なのかもしれないが。

彼女を一言で言い表すならば“夜”。

凜とした漆黒の瞳に手入れのされた黒く長い髪。こちらもコート

を羽織っており、中には少年と同じデザインのブレザーを着ていたが、瞳に合う真っ黒な色だった。

少年が少女の整った顔立ちを視て、感じ取る。(近ごろの世間では地球温暖化とか問題にして喚いているが、この季節の夜はお世辞にも“温暖”とは言い難い。むしろ地球寒冷化では?)

「そうだね。早紀の言うとおりだよ。」

相棒として組まされたのは2年前。あの夜から一緒なのだ大体の事はわかつているつもりだ。

一つ気になるのは、自分より身長が高いこと。170センチ近くあるだろう。

「今日はどんな依頼だったっけ？」

「…護衛と殲滅」

「あつ、思い出した！確かに護衛と戦闘だったね。」

早紀と呼ばれた少女の瞳が隣の少年に向けられる。

大方、“殲滅”を“戦闘”と言い直されたことが気に掛かるのだろう。早紀は思う。(貴様は気が優しすぎる)

「そんなことは無いと思うけど…」

少年は俯きながら、しかし決して弱音ではない、透き通った高い声で早紀に答えた。

第一話「夜道」くそく（前書き）

長くなりました。

第一話「夜道」くさく

広い公園を二人で歩く。周りには木々が立ち並び、白い粉が優しげにかぶさっている。足元の雪は5センチ程で、歩くのに多少の抵抗があるくらいだ。

歩きたびに白と黒のブーツは雪を踏みしめる。聴覚を意識すれば、雪を踏むギツて鳴る音と、雪が降り積もる音、布が擦れ合う音が聞こえる。

早紀が和やかな音の中に、不協和音を感じ取る。そんなのは、この広い新東京では日常茶飯事なので放っておく。

右側に違和感を感じて、少年の顔をチラと見やり、あることに気が付いた。気掛かりなので聞く事にする。

「…マフラーはどうした？」

「えーと…無くしちゃったから、本部に特別発注してるんだ。明日の晩には届くかな？」

(阿呆か…)

「早紀はズバツと痛いトコつくなあ」

黒いスカートが冷たい風にはためいた。ふと、早紀の耳がピクリと動く。

「…湊みなと伏せる」

「うん？」

早紀が短く呟く。湊と呼ばれた少年は右膝を折り曲げて、屈んだ。膝に雪が付く。

プシュ、プシュ。

近くの雪に何個か穴が開いた。サイレンサー付きのワルサー系の黒い銃から、螺旋を描き、空気を切り裂き、弾が飛び出す。

(…素人じゃないな)

前の仕事も命を狙われる事などザラだったが、今の機関に所属したときから更に狙われる事が多くなった。

(湊は…)

早紀は胸元に飛んできた、大量生産のそれをヒョイと躲して、湊を見た。黒い男達の銃弾の雨を器用に避けて湊は、

「危ないよ！わったった！ちよつ、ちよつと話し合わない？」

とか、言っている。その言葉からは焦りなど微塵も感じられず、遊んでいる風にしか見えなかったが…。

人目に付きにくい公園でも、消音効果のある銃を使っている事から、相手は相当の手練だとわかる。事実、弾の一発、一発は人体の急所的に狙い定められている。

それを避ける早紀と湊が人間離れしているのだろう。戦闘慣れしているだけかも知れないが…

先程から銃で牽制しつつ、こちらの間合いに入ってきて来ないところを観ると、彼らがこちらを調べてきているのは明らかだった。

(チツ、殺るか)

最後の一発を撃ち、装填しようとしている男を見つけた早紀は、目を瞑った。傍目から見たら戦闘の最中に目を瞑るなんて自殺行為だと思っただろう。しかし、早紀はまるで見えているかの如く、弾を躲す。

(右、左、前、斜め後ろ)

早紀はバックステップして距離を更にとり、一度目を見開いて湊を見る。湊は弾を楽しそうに避けている。好戦的なのは早紀の方なのだ、完全にお株を奪われている。

早紀は湊が気付いてない事を確認してから、腕を体の前で交差させ上体をピンと張り、ボソボソと何かに呟く。

「闇に生き、光に死す、暗夜の名において命ず。世に存在しむる欠片は我にひれ伏せ。」

直ぐに声が聞こえる。

《承知した。我らが主は何を求む。》

心に語り掛けてくる、重なり合う声と対話する。

(散る力を)

《では、存分に遣うがよい》

目を閉じ、頭の中で“死”を想像する。交差した右手に力を込めると、灼熱の黒い炎が早紀の半径1メートルを包み込む。

そして、右手に集約された地獄の業火は、禍禍しい雰囲気を醸し出して何かの柄のようになる。

それを軽く握り締めると、早紀は目蓋を開ける。瞳は紅々と輝き、少し放心したかのように焦点が定まっていない。口からは一筋の赤い液体を流す。その不気味さは悪鬼や死神といった類、そのものだった。徐々に生氣を取り戻し完全に見開かれる。

目は男達を見据え、まだ構築されている最中のモノを掴み、眼前の敵を滅ぼしにかかった。

しかし、まだ3歩も踏み出していないうちに、目の前に何処からか瞬間移動したかのように雪が舞い降りた。瞬間のうちに、時間が止まったが如くフワリと着地して、湊は優しげな瞳に心配の色を浮かべて、早紀に問う。

「約束を破るの？ソレは遣わないって約束したよね？」

少し潤んだ瞳で聞かれた早紀は、
「…すまない」

と、目を逸らして謝罪。首を下に傾けたので、長い髪がサラサラと胸の前で流れる。

湊に言われて、手に持っていた何かの柄を解く。

それは早紀の手元から離れ、砕け散り、闇へと掻き消えた。それを見届けた湊は男達に振り向いて質問を投げかけた。

「あなた方は闇の人間ですね？ 僕らは人違いでは？」

「……」

男達は答えずに、銃を向けながらゆっくりと後退りした。

そして、男達は去っていった。銃の雨が止み、静寂が訪れ、湊の瞳は安心したようだ。辺りの綺麗に積もっていた雪は、先程の交戦で見る影も無い。

(勿体ないな)

「そうだね…でも、また積もるよ！」

その瞳には何が見えたのだろうか。

「あの…大丈夫ですか？」

不意に背後から聞いたことのある女性の声が聞こえ、二人は振り向いた。

そこには今回の依頼人、橘たちばなみどり 緑が少し怯えた顔で立っていた。

第二話「橘緑」

橘緑は足がすくんだままだった。

それもその筈で、緑の父親が極秘裏に待ち合わせを指定していた場所に行くと、目の前に何十人という黒服が銃を構えていたのである。しかも、交戦中であり、たった二人に対して金属の弾を浴びせている。

その二人は常人には残像しか見えない動きで移動しており、その実力は申し分ないものであったのだ。これ以上の人材はいないと感じた緑は、黒服の男たちに撤退を命じて、あたかも心配しているような顔で二人に近づいた。

近づいた時に殺気に当てられた緑は、作った表情が崩れ去るのがわかった。つまりは、生まれて初めて感激と畏怖を同時に感じたのだ。

銀髪の小柄な少年は緑を振り返り一言。

「そちらも大丈夫ですか？」

緑は先に声を発していたことに気付いて、驚いた。あちらの二人は戸惑っているようにもみえたが、なんとなくその理由はわかっていた。

彼らの依頼主、橘金満かねみつの長女兼社長跡取り候補の筆頭である“令嬢”という虚偽の飾りを身に纏うのだ。

奇妙な形で出会った緑を見ても、早紀の表情は変わらない。

(この令嬢は何考えている？護衛される身がこんな場所に自ら来るとは…理解しがたいな)

早紀の瞳からは、そう読み取れる。

(もう…しょうがないなあ)

湊は思考の対象を緑に代える。(身長は僕より高いかな…早紀と同じくらい。シヨックだああ)

っと、湊は不必要な情報を認知して軽く自嘲する。その笑いをみて、緑の強張った顔が、少し和らいだようだ。

(自分の顔は変な風ではなかったのかな。)

先程(戦闘時)からの疑問は緑という人物を確認したときに解決していたので、とりあえずは緑の用件を聞くことにした。が、

「ここは寒いですから、どこかに移動しませんか？」

緑の提案は二人を心配したものだろうが、

「いえ、ここはあなたを守るのに最適な場所ですよ。」

湊は却下したが、命令ならば従うほかはない。だから、雪で少し整りつつある地面に左足を踏み出した。

「わかりました。あなたの言うとおりにします。」

あっさり了承を得たことで、湊は緑が頭の回転の良い女性であることを理解した。

「では、立ち話もなんですから、ベンチに座りましょうか？」

湊は、左手を青いベンチに向けて優しく話す緑の案に異論はなかったもので、一応早紀にも聞いてみる。「早紀は？…って早紀、早すぎ」

すでに早紀は緑の示したベンチに腰掛けていた。

湊は急ぎ足で緑について行き、早紀の横に座った。これで緑の用件を改めて聞く準備が整った。

上はベージュ色のセーター。したは赤のロングスカートという防

寒対策のある格好で、緑は話しはじめた。

「依頼というのは、敵対する貿易会社から私を守ってほしいのです。」

「その会社は“石倉貿易会社”ですよね？」

「よくご存じですね。あの会社は…」

「表向きは香辛料や、製品を輸出入するただの貿易会社。だけど、裏では麻薬や兵器を取引する汚い仕事を専門に扱う闇企業。…って感じですか。」

一瞬だけ、茶色の目に動揺の色が浮かんだが、納得の表情になる。

「さすが“情報”の力は素晴らしいですね。」

「しかし、この情報は既成のモノで、詳しい話をしていただけるとより正確な形になります。」

「もちろん話しますよ。」

緑はベンチに腰掛けて話そうとする。

「でも、あなたの力なら私の思考なんてすぐわかるはずですよね？」

湊は満面の笑みで答える。

「僕の力を知っているんですか？なら、早速はじめましょうか。」

「はい。よろしく願います。」

湊の瞳が緑という“情報”をとらえた。

第三話 「初見」(前書き)

更新が遅れてスイマセンでした。読んでいただけ幸いです

第三話 「初見」

早紀は湊を見た。湊は緑を見ている。

否。

目蓋を閉じているのに？

否

目蓋を開けるだけが見るといふ行為ではない。人間の眼球には水晶やら、網膜やらがあり、光りの屈折を利用して、見るのだ。

しかし、視覚を閉ざすと、闇が広がる。そこから常人と一線を引いた者との違い。空気の振動、まわりの匂い、舌にふれる雰囲気、手触り、そういった感覚を研ぎ澄ます。それではつきりと視る。そう、視たという表現が一番しっくりくる。

湊が湊であるがための当然の行為。初めて出会ったあの日から、湊の行動には興味をそそられる…

2年前

「闇夜の烏さんですね？」

「誰だ。」

仕事を終え、血が足にかかるのを気にしながら、死骸の上を歩いていると、深紅の赤に真っ白な何かがあった。人間だと気付いたのは話しかけられたから。人間とは違う音を発する物体は私に音をぶつけた。

初めて聴く音。死骸の上を歩く、少年か少女かわからない顔を
した“音”は一步ずつ、臆する事無く私に近づいてくる。

革靴と石畳が織り成す、心地よい旋律。

コツーン、コツーン。

なおも鳴り止まぬ足音。然るべき問いを音に発する私に、異質な
音は一部の淀みもなく返してくる。

「民間企業の者です。」

聞き入っていた頭が冴えてきたので考える。

民間？この場をみて気に掛けない民間人がいるか？いるわけはな
い。しかし、恐怖や畏怖という感情が欠落している人間なら話は変
わってくる。そういう異端な存在は自己防衛を犠牲にしても快樂
にはしる傾向があるため、ある種の神獣と同等かそれ以上に厄介で
あることを理解しているから。

この場合は真偽を問うより、話をすすめた方がいいはず。

「何用だ？」

多少、音が震えていたが唇が乾いていたからだと気付き舌でゆっ
くり舐める。

「あなたにお話したいのは、僕：こちらとしてもありがたいので
が、殺気を向けられると話しづらいですよ。」

「……………」
「…では、僕らの目的をお話しますね。」

やつの音は気分を害するものではなかったので、勝手に話をすす
められても問題はない。むしろ、この深紅の世界では聴きたくない
音だ。

「…どこでか？」

「あつ、そうですね。では、近くの公園にいきしょうか？」

さらさらした白銀の髪の少年。彼の後をついていく私の漆黒の髪。相容れることのない対極の色。この時、私の頭にはチープな外国映画の終局の映像がエンドレスに流れていた。

ふつ、と微笑してしまった。それは私に対する嘲笑であり、初めてあつた非人間に対する羨望を込めた賛辞なのか、私自身にもわからない。

わからない。この感情でさえ初めてかも知れない。言語化するには私の知識が足りなかったのだ。

くす、今度は少年から聞こえた。振り向きざまに、

「あなたは何を信じますか？」

初対面の人に突飛的に聞く事ではないだろう。しかし、まだ幼いボーイソプラノの声は、私の回答を待ってるのだ。答えなくてはならない。

「信じる…か、今までは“音”を頼りにしてきた。だから、音を信じるということになるのだろうか。」

「そうではありません。信じると頼る、一見して意味は同じに思われるでしょう。しかし、信は真に通ずると僕は考えています。信じれることは、頼るといふような一方通行の思いじゃないんですよ。」

「貴様は何を信じる。」

「僕は…僕の仲間を、絆を信じます。」

心音に乱れはない。つまりは嘘ではないのだろう。

「絆…知らない言葉だ。」

そう、私の耳には知らないメロディーが流れ込んでくるのだ。それは歪だが、確かに存在するのだろうか。

他愛のない話を聞かせてくれるうちに公園に着いた。時計をもた

ない主義だから、時間はわからないが脈拍数から察するに、十分と
いったところか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4218b/>

GiMMicKパーツ ~夜に咲く~

2010年10月10日00時58分発行